

研修報告書No. 15

所 属：東邦大学医療センター大森病院
氏 名：2年目研修医 柏木 克仁
研修先：特定医療法人長生会 大井田病院
医療法人聖真会 渭南病院
宿毛市立 沖の島へき地診療所

地域研修はいわゆる医師不足の地域で行いたいという正直安易な理由で、このプログラムに応募させて頂いた。その際は将来どのような医師を目指すかも決まっていなかったものの、何となく“全身を診れる医師“にはなりたいと考えていた。最終的には自大学の総合診療内科に入局し、特に感染症を専攻分野にしようとして決定した。たが、都市部の大学病院ではまだまだ新しい診療科で方向性を模索しているところもあり、正直私の進路が正しかったのか、自分の中で解決できていないところがあった。大学であると専門家が多数おり、自分の専門外であると他の医師に任せるというスタイルが定着している。もちろん専門家であり知識も多数あるため患者さんにとっては安心できることもあるが、病院内の複数の診療科を同じ日に回っていることも事実である。私は同じ職業であるにも関わらず、専門外は見ないということが当たり前になっていることに対してどうしても納得がいかず、今回研修に臨んだ。

実際に高知を訪れてみると、総合内科医の役割は非常に重要であった。今回研修を行った大井田病院と渭南病院は異なる性格を持っており、宿毛市の大井田病院は、けんみん病院と連携をとり、かかりつけの急性期から慢性期を重視していた。一方土佐清水市の渭南病院は宿毛まで1時間という距離もあり超急性期も行う病院であった。提供する医療は異なるもののどちらの病院も地域住民にとってはなくてはならないものであり、病院というものがどれだけ重要なものかを痛感し、診療所や病院がなければコミュニティは成り立たないのだと痛感した。4週間の中で両病院でも外来を行う機会もあったが、その中で一番感じたのは分からないということが原則許されないということである。外科の外来においても内科・整形外科・婦人科・皮膚科疾患など患者さんの主訴は多岐に渡っていた。指導医の先生方は自分で、画像の読影、内視鏡検査、超音波検査はもちろん、外科的処置まで何でも行え、一言でいえば本当に恰好良く、地域の患者さんたちにとって無くてはならない存在であった。また、医師に加えコメディカルのスタッフの存在は地域医療では都市部以上に重要な存在であった。今回も患者さんの中には高齢独居で病院まで30分以上かかり、携帯電話も通じない環境で暮らしている方がいた。医師は疾患に対しての治療は行えるものの、日々の生活までは関与できず実際に処方された内服薬を服薬しているか、生活している環境がどうであるかなどを確認することはできない。今回、訪問看護師や地域医療包括支援センターのスタッフの方に同行させて頂き、実際に住居を訪れる機会があった。服薬状況や普段の生活状況などを記録し、また周囲の隣人からも話を聞き、それを病院にフィードバックしており、医師も治療方針を変更していた。大学病院であると、ソーシャルワーカーなどのスタッフに退院後のことについては任せてしまうことが多かったが今後は医師の側からも積極的に意見を述べたいと思う。ただ、高齢化社会の問題も研修の中で

度々感じ特に沖ノ島診療所での研修では毎年人口は減少し、商店などの生活に欠かせないものも数が減ってきており、集落として今後成り立たなくなってしまうのではないかと感じ、社会保障費の問題は他人事ではなく真剣に取り組まなければならないと感じた。

4週間という短い期間ではあったものの、地域医療の実態と問題、そして地域医療に携わっている様々なスタッフの真剣な思いを感じ取れ本当に有意義であった。私も総合内科医として、「分からない」「できない」とは言わず、目の前の患者さんに対して、生活環境まで考えた医療を提供できる医師になりたいと強く感じた。最後になりましたが、このような機会を与えて頂いた高知県の方には心から感謝しており、私も”高知家の一員“としていつか恩返しができると思っています。本当にありがとうございました。